慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中級の読解授業：新聞講読科目の例を通じて
Sub Title	
Author	加藤, 奈津子(Kato, Natsuko)
Publisher	慶應義塾大学日本語・ 日本文化教育センター
Publication year	2016
Jtitle	日本語と日本語教育 No.44 (2016. 3) ,p.59- 83
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	調査報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20160300-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』44：59-83（2016.3）

中級の読解授業
―新聞講読科目の例を通じて―

加　藤　奈津子

1.　はじめに

今回は、新聞講読の春・秋 2 学期の授業報告を通じ、中級前半の学習者に向けた講読授業の内容を、目標と方法の点から報告する。

まず、「2 授業の枠組み」において、目標と方法について述べる。次に、「3 授業運営」において授業の報告と、来学期へ向けて改善すべき点について記述する。最後に、「4 今後の研究課題」で、今回扱えなかった問題点を今後の研究課題として挙げたい。

2.　授業の枠組み

本授業報告は慶應大学日本語・日本文化教育センター　日本語研修課程に設置された科目「新聞講読 5」における、2015 年春・秋学期の授業内容に基づくものである。同科目は読解系科目のうち、新聞を教材とした講読科目で、学習レベル別に 4 段階に分かれている。「新聞講読 5」は初級が終了した段階の中級レベルの学習者を対象としており、その上のレベルに 6、8、9 の科目が設置されている。授業は 1 コマ 90 分、15 週である。

2-1　到達目標

目標は（1）必要な情報を速く把握する能力を向上させる、（2）漢字語彙を中心に中級の書き言葉の運用に必要な語彙を増やす、の 2 点である。

（1）論説などを除くと、新聞記事を読む目的は精読よりは情報把握にあるとの考え方に立ち、記事を「斜め」に読み、更に精読したいと思った時に

は詳しい情報も読み取れる基礎力を養成することを目標とした。

(2) 中級の文法項目の導入、練習を行う際、語彙提出も同時にすることは少ない。そのため、文型を使った文を書かせた時に、文体は書き言葉であるが、語彙が初級レベルのままということがある。そこで、読解教材で中級語彙を増やすことを通じて、中級レベルの読解力に加え、文章作成力も向上させることを目標にした。語彙選択の際には、中級では漢字語彙が増えることを考慮して、漢字語彙を中心にした。

2-2　受講者

表 1 は受講者をレベル、漢字圏・非漢字圏、日本語能力試験歴から見た内訳である。レベルは学期の初めに行う学習段階分けテストの結果による分け方に基づく。漢字圏・非漢字圏の欄では、区別ができないケースはその他とした。秋学期に実施した日本語学習歴についてのアンケートの結果が、日本語能力試験の受験歴欄である。受験歴の有無、合格したレベルを答えてもらった。

表 1　受講者の内訳

	春学期	秋学期
レベル	初級後半　7 名 中級前半　12 名	初級後半　3 名 中級前半　16 名
漢字圏 非漢字圏 その他	漢字圏　7 名 非漢字圏　10 名 その他　2 名	漢字圏　8 名 非漢字圏　6 名 その他　5 名
日本語能力試験の受験歴 * 合格したレベルは重複も含む	実施せず	N1 合格　2 名 N2 合格　3 名 N3 合格　3 名 受けたことがない　8 名 未回答　1 名

2-3　2015 年春学期・秋学期の授業シラバス

春学期と秋学期は基本的に同じシラバスを使用したため、春学期のシラバスのみ紹介する。

2-4　2015 年春学期・秋学期の授業方法

授業の方法は、中級に必要な語彙と中級文型の理解を中心に文の大意を把握させるやり方をとった。以下、「授業の進め方」「記事の選択」「教材の作成」「評価方法」の 4 点から記述する。春学期の授業方法を基本とし、秋学期は学生のレベルに合わせて変更を加えた。変更点は「3-2-2-1　秋学期：授業の進め方」において詳述する。

表 2　2015 年春学期の授業シラバス

学習目標	簡単な新聞記事から読み始め、新聞の文体や言葉に慣れていくことによって日本語で新聞を読むことの基礎を作る。新聞記事を読んで、日本社会についての理解も深める。
学習内容	1 週間に 1 つの新聞記事を読む。文章の内容について学生が質問に答えたり、教師が説明したりする。「漢字の読み方シート」と内容の確認のための「まとめのシート」を書く。
使用教科書	新聞記事、または新聞記事から担当者が作成したもの
評価方法	◇ 50％　出席回数（全 15 回の 60％以上が必要）、授業への参加、「まとめのシート」の提出（A～C の成績をつける。D は不合格） ◇ 25％　毎回の復習テスト（前週の授業について 10 分ぐらいのテストをする。テストの内容は「漢字の読み方」＋「内容についての質問」） ◇ 25％　学期末テスト（学期中に勉強した記事の「漢字の読み方」＋「内容についての質問」）
授業予定	①　個別学習指導期間 ②　初回レベルチェックテスト、科目の紹介 ③～⑭ 授業　＊④から授業の最初に復習テストを行う ⑮　授業のまとめ、期末テスト

2-4-1　授業の進め方

漢字語彙を増やし、記事の大意把握能力を向上させるため、特に次の点を重視した。①漢字は読み方だけ書かせる。②分からない言葉があっても既習の漢字から類推ができれば読み進める。以下、春学期 4 回目の授業を例に説明する。

授業例:「GW 旅行　国内は過去最多　JTB 推計　海外は減少続く」

①キーワードを板書しておく: 学生は当日の記事内容は知らない。キーワードからイメージを持たせる。この回のキーワードは『GW 旅行』である。

②復習テスト: 10 分が目安。

③漢字の読み方を書く: テストが終了した学生にワークシート 1 枚目の「漢字の読み方シート」を渡し、漢字の読み方を書かせる。この時点では辞書は使用させず、分かる読み方だけ書かせる。初めて見る単語でも既習漢字が入っていて読めるものがあれば、その読み方だけ書くのでも構わない。その漢字から意味が類推できれば、次の漢字に進む。例えば「観測する」は初めて見るが、「観光バス」と「測る」は読める学生には「観（かん）」を書かせ、全体の意味を考えさせる。教師が机間巡視し、辞書なしではそれ以上書けない学生に辞書の使用を許可する。調べながら、単語の連なりから記事の内容を推測するように指示する。テストの終了者に順次同じ作業を指示する。辞書を使っても分からない読み方は、挙手して教師に質問するよう促す。難解な単語が別記してある場合、それも読ませる。

④記事を読む: 読み方が書けた学生に見出しを隠した記事を渡す。「斜め読み」で通読するよう指示する。

* その後 7〜8 割の学生が記事を読み終えているのを確認したら、全体の作業を終わらせる。

⑤意識付け: 板書の「GW」から受けるイメージや、斜め読みから分かったことを言わせる。

⑥語彙の説明: ワークシートの漢字を教師が板書し、読み方を書く。読解

に必須、または難解な単語には説明を加える。動詞は助詞とともに例文も出す。学生は板書を見て、読み方を自分で訂正する。(最終的な訂正はワークシート提出後、教師が行う)

⑦記事を読む: 斜め読みと単語の意味の確認により、準備ができたことを確認し、読解に入る。以下、読解の手順を (1) ～ (4) で述べる。

(1) 学生に一文ずつ読ませ、意味のまとまりごとに別の学生に内容に関する質問をする。〔第 3 段落〕を例に説明する。

〔第 1 段落〕旅行大手 JTB は 2 日、ゴールデンウィークに国内旅行に…。 …… 〔第 3 段落〕5 月 2～6 日が 5 連休になるため、旅行も後半に集中しそうだ。新幹線が開業した北陸や、観光列車が走る九州が人気という。

(質問 1) 連休後半に旅行が集中するのはなぜか。

(質問 2) 北陸が人気なのはなぜか。九州が人気なのはなぜか。

(2) 文法を説明する。

(質問 1)「…5 連休になるため [原因]、…」

原因を表す文型に注目させる。

(質問 2)「新幹線が開業した北陸や、観光列車が走る九州」

北陸を修飾する部分、九州を修飾する部分が原因となっていることを指摘する。

(3) 文型を取り出し、文脈の中でどのように使われているかを確認する。

「…九州が人気という。」

この段落では情報源が書かれていないが、「…という」の文型が使われていることから、伝聞情報であることを指摘する。既述部分から情報源である「旅行大手 JTB」を見つけさせる。

(4) 語彙の確認「(旅行) 大手」は「大手企業」の略であることを教える。

⑧ワークシート: 読解終了後、2 枚目の「まとめのシート」を配布。(1) 内

容理解を確認する正誤問題、(2) 自分で「見出し」を考える課題から構成される。(2) は配布記事では見出しを隠していたので、見出しを考えることで大意をつかむ練習をする課題である。学期前半は選択式であったが（初回レベルチェックテスト参照)、後半は自分で見出しを作らせた。7〜8 割の学生が作業を終了した時点で、口頭で答え合わせをし、教師が正解を板書する。最後に「見出し」が書かれた記事を配布し、自分の選択したもの（後半では自分が書いた見出し）と付け合わせる。次週の復習テストの準備に使用するため、持ち帰らせ、テスト後の提出を指示する。

⑨漢字読み方シート：春学期のみ使用。記事全文を打ち直し、漢字に下線をひいたもの。希望者が使用し、評価には入れない。漢字の読み方が弱い漢字圏の学生の要望で導入した。漢字圏の学生にはワークシート作業の終了が速い者が多いので、速く終わった時に渡した。結果として、クラスの作業の時間調整にもなった。

2-4-2　記事の選択

記事の選択は①文字数②分野③文型④語彙の点から行った。

①文字数：90 分の授業から、「復習テスト」・「ワークシート 1 枚目・2 枚目」の時間を引いて残った 45 分で読める長さ。

②分野：政治・経済・社会が中心。朝日・讀賣・日本経済の各紙から選択。

③中級文型：「中級日本語　語彙・文型例文集」（東京外国語大学　留学生日本語教育センター）の 1 課〜11 課で扱われているものを指標とした。

④語彙：「中級日本語」（東京外国語大学　留学生日本語教育センター）の 1 課〜11 課で扱われているものを指標にした。

2-4-3　教材の作成

教材は次の 2 種類である。

①記事のコピー（300 字前後）2 枚：「見出し」を隠したもの 1 枚と「見出し」があるもの 1 枚。

②ワークシート 2 枚：1 枚目は記事を読む時に必要となる漢字に下線を引

いた「漢字の読み方シート」。難解な単語は「*」とし、下欄に説明を書いた。必要に応じ英語も付記した。2 枚目は内容確認の「まとめのシート」。

2-4-4　評価方法

①復習テスト：10 分程度。漢字の読み方 18 題、内容の質問（選択式）4 題。30 点満点。

②ワークシート：次週の復習テスト後に提出。A＋～D で評価。

③期末試験：90 分。記事 3 点を学生が選ぶ。まず、漢字に読み方を書く（54 題）。漢字の用紙の回収後に内容の質問用紙（選択式）を渡す。質問の試験は記事を見てもよい。ただし、ワークシートは見てはいけない。（* 秋学期は内容質問に記述式も採り入れた。）

3.　授業運営

3-1　初回レベルチェックテスト

2015 年春学期のカリキュラム改変に伴い、全技能別科目に初回レベルチェックテストが導入された。同テストは履修者のレベル差をなくすことで授業運営を円滑にすることが目的であり、テストに合格した者が履修登録することができる。

「新聞講読 5」でも春・秋学期の初回授業で 10 分程度のレベルチェックテストを行った。テストは I.　漢字の読み方を書く、II.　内容質問、III. 択一式で見出し文として適切なものを選ぶ、の 3 部から成る。記事の大意が理解できる語彙力と文法力が合格基準である。従って、研修課程全体の学習段階分けテストの結果、初級レベルに入った学生であっても、漢字力と読解力が合格基準に達していれば履修は可能である。

履修者は初回レベルチェックテストに合格しているので、学期初めのレベル差は小さかった。そのため、作業や説明に要する時間を予測したり、語彙レベルに基づいて記事の選択をしたりすることが容易になった。

表 3、4 は 2015 年秋学期の初回レベルチェックテストである。（記事と

表 3　2015 年秋学期　新聞講読 5　初回レベルチェックテスト
記事

「大学教授らが今月、大学生のアルバイトの調査を行い、アルバイトをした大学生のうち 4 割が深夜に働いていることが 4 月 28 日、わかった。また、睡眠不足などで授業に集中しにくくなるケースが多いこともわかった。今回の調査では日本全国の 27 大学で勉強している大学生の中から、アルバイト経験がある 3593 人の学生に質問をした。この調査は昨年 7 月にも行われた。

深夜のアルバイトは昼よりお金が多くもらえるので、深夜にアルバイトをする学生もいた。深夜アルバイトで午後 10 時～午前 5 時に週 1 回以上働いたケースは 4 割強もいた。」　（2015 年 4 月 29 日　朝日新聞・朝刊から作成）

表 4　2015 年秋学期　新聞講読 5　初回レベルチェックテスト
質問

I　＿＿＿の漢字の読み方を書きなさい。

調査	4 割	働く	不足
集中	経験	全国	昨年

II　記事の内容と同じ文には（○）、違う文には（×）を書きなさい。
（　）アルバイトの調査をしたのは今年の 4 月と 7 月だ。
（　）アルバイトの調査を行ったのはアルバイトをしたことがある大学生たちだ。
（　）睡眠不足になると、授業に集中できなくなることが多い。
（　）深夜（午後 10 時～午前 5 時）にアルバイトをした大学生は 50％もいた。
（　）深夜のアルバイトは昼のアルバイトよりお金が多くもらえる。

III　この記事の内容に合っている文に（○）をしなさい。
（　）学生バイト　睡眠時間が 4 時間
（　）学生バイト　勉強時間が 4 時間
（　）学生バイト　深夜の仕事が 4 割
（　）学生バイト　睡眠不足が 4 割

質問の 2 枚）

3-2　授業の報告

春学期・秋学期に分け、「授業の進め方」「記事の選択」「教材について」「学習目標の達成」の点から報告する。秋学期の最後に、2 学期を通じての

報告と来学期へ向けて改善すべき点について記述する。

3-2-1　2015 年春学期

3-2-1-1　春学期：授業の進め方

授業開始までは担当者も、学生が初見でどの程度記事が読めるか予測できなかった。しかし、授業の進め方は初回レベルチェックテストの構成を基本とし、90 分の授業に拡大したものであるため、テストの合格者である履修登録学生は実質的な 1 回目の授業でもこの進め方についてきていた。以下、授業の目標である①内容理解力、②語彙力の点から学生の様子を報告する。

①内容理解力の指標として、記事を斜め読みし終えるまでの長さと、内容質問への答え方を見た。数字が中心の記事は、文構造が単純なので、斜め読み時間は回数を重ねるうちに短縮した。内容質問への答え方では当初、質問の対象箇所が分からない、必要な情報が入れられない、質問に合わせた形で答えられない、などが見られた。7 回目ごろから情報と形式の両面から適切に答えられるようになった。しかし、人物紹介のコラムでは、省略が多く、修飾節も長いため、行為の主体が分からなくなるなどして、内容を理解し切れなかった。11 回以降は、同一分野での語彙の重なりが意識されたことが後押ししたのか、再び斜め読み時間が短くなった。

② 4 月には辞書を見ないでも読める漢字の数が十分ではなかったため、漢字の読み方の作業に時間が長くとられ、15～20 分程度かかった。しかし、この作業は自力で語彙を増やすためには必要なので、8 割の学生が調べ終わるまで次の作業には移らなかった。作業が遅い学生には声をかけて教師が手助けをしたが、作業時間にはかなり個人差が出た。読み方だけの作業だが、漢字圏の学生の方が速い傾向が見られ、初級レベルの学生であっても非漢字圏の中級学生より速かった。6 月頃にはクラス全体の作業時間はかなり短縮していたが、個人差は縮まらなかった。

読み方に慣れて作業効率が上がり、時間が短縮するのに従い、手助けが

不要な学生が増えた。最後の 2 回では声掛けをしても全員が「大丈夫です」と断り、教師は見ているだけだった。これは、重複する単語が何度も出てくるうちに、語彙が増えたことが一因だと考えられる。この点については 3-2-1-2「記事の選択」との関係で述べる。

3-2-1-2　春学期：記事の選択

具体的な記事は表 5 の通りである。

記事の選択では、①配置時期、②語彙の関連性の点を考慮した。同時期の記事には語彙の関連性が見られ、更に同分野だと語彙の重複性は高まるので、これを語彙力向上に利用した。

書き言葉の読解に慣れていない 4 月には、事実関係を述べる記事で「原因・結果」の読み取りの基礎を固めた。これらの記事は数字を中心としているので、数字の把握も特に練習した。分野は経・社会である。「割⇆%」「超」「上回る・下回る」「切る」「強・弱」を集中的に扱ったが、その中では「強・弱」の使い方が分かりにくいようだった。3〜7 回は、重なった語彙が出てくることを意識して記事を選んだが、2015 年 4 月は「値上げ」「円安」「旅行」が紙面で取り上げられることが多く、結果的に語彙が重なることになった。初見の漢字語彙であっても、どこかに既習漢字が入っていれば、意味の類推が容易になる。読み方が分からないと言う学生に質問すると、どれか 1 つは知っていると答えることが多かった。そこで、別の漢字と組み合わせられて新しい漢字になっても、既知の漢字と意味が重なる部分があること、あるいは組み合わせにより新しい意味の単語になることに注意を向けさせた。また、漢字の読みかえは特に意識させた。これらの重複する漢字はワークシートに何度も登場させるようにし、読み方の定着と達成感を重視した。次第に漢字語彙が増えることになったが、これは作業時間の短縮に結び付いた。

8・9 回「『哲学』人気じわり」では、行間を読む練習のためやや長い文章を取り上げた。引用部分に話し言葉があることと、心情についての表現も

表 5　2015 年春学期　使用記事

回数	授業内容	分野
①	個別学習指導期間	
②	初回レベルチェックテスト 「エボラの死亡率―赤ちゃんは 9 割―」 （2015 年 3 月 28 日　朝日新聞・朝刊）	社会
③	「食品・飲料　値上げの春」 （2015 年 4 月 1 日　朝日新聞・朝刊）	経済
④	「GW 旅行　国内は過去最多」 （2015 年 4 月 3 日　朝日新聞・朝刊）	社会
⑤	「『通』の訪日客に　ひと味違う旅」 （2015 年 4 月 20 日　日本経済新聞・朝刊）	経済
⑥	「ユーグレナ、米大と研究」 （2015 年 4 月 18 日　日本経済新聞・朝刊）	科学
⑦	「ブラックバイト横行」 （2015 年 4 月 22 日　朝日新聞・朝刊） 「学生バイト　深夜労働 4 割」 （2015 年 4 月 29 日　朝日新聞・朝刊）	社会
⑧	「迷える時代の羅針盤？『哲学』人気じわり」① （2015 年 4 月 3 日　讀賣新聞・朝刊）	社会
⑨	「迷える時代の羅針盤？『哲学』人気じわり」② （2015 年 4 月 3 日　讀賣新聞・朝刊）	社会
⑩	「ときめく片づけで『影響力のある 100 人』に」 （2015 年 6 月 2 日　日本経済新聞・朝刊）	社会
⑪	「『朝型勤務』普及を要請　厚労相、経団連会長に」 （2015 年 4 月 21 日　日本経済新聞・朝刊）	社会
⑫	「トヨタ終日在宅 OK　1 歳未満子育て社員　男性の利用可能」 （2015 年 4 月 3 日　日本経済新聞・朝刊）	社会
⑬	「育児中に『終日在宅勤務』トヨタ、今月から新制度 （2015 年 4 月 3 日　朝日新聞・朝刊） 「労働関連 3 法案⑦　有休義務化　ホントに休める？」 （2015 年 6 月 26 日　朝日新聞・朝刊）	社会 政治
⑭	「『心の病』労災最多 497 人」 （2015 年 6 月 26 日　朝日新聞・朝刊）	社会
⑮	期末試験	

あることから内容理解に個人差が出た。10 回の人物紹介のコラムは反応の個人差が最も大きく、特に「人形を捨てる時に目を隠して捨てる」部分に関し、理解できないと言う者が少なくなかった。

この時点で春学期はアンケートを行い、関心分野の分布を調べた。仕事の経験がある者や、日本での就職が視野にある者は、「日本的なサービス」「通勤電車」「残業」など、日本人の働き方に関心があった。アンケート結果と 7 回目「ブラックバイト」への関心が高かったことに基づき、11〜14 回では、「日本人の働き方」に関する記事を 4 種類選んだ。同分野の記事を読み続けることで、語彙力を積み上げることを目指したためである。11 回「『朝型勤務』普及を要請」は、事実関係のみで複雑な文はない。また、この分野の基本的な単語が扱われているので、最初に読むのに適していた。記事中の「厚生労働相・育児・介護・企業・残業・労働時間・長時間労働・働き方・労働生産性・時間外手当」は 12〜14 回でも頻出する。「労働」、その中でも「働（く）」は登場回数が圧倒的に多い。12 回「トヨタ終日在宅 OK」（日本経済新聞）では「在宅勤務・勤務年数・勤務管理」と「勤務」も複数の語彙にまたがって登場した。「子育て」も中心語彙だった。

次に、同一内容でも新聞社によって扱い方が異なる場合、語彙がどの程度予備知識として有効かを見るために、13 回「育児中に『終日在宅勤務』トヨタ今月から新制度」（朝日新聞）を読んだ。日本経済新聞にはなかった「育児中・幼い子供を育てる社員・女性管理職」の単語があったが、12 回との重複語彙として意味が分かるため、学生は初めて見る漢字とはとらえなかった。読み方も正確に速く書けた。また、「子育て」（12 回）と同じ意味で「育児」「幼い子供を育てる」が使われていることも理解していた。14 回の「『心の病』労災最多 497 人」は事実関係の背景に労働文化があることにも触れた記事だった。文字数も学期中で一番長く、漢字の読みを書く作業量も最も多かった。しかし、記事中の「長時間労働・時間外労働」は既読記事にあったので、ほぼ全員が読み方を正確に書いた。「過労死・労働災

害」は初出だが既習の漢字が組み合わせられたものであるため、作業の間、ワークシートの記述を見ると、多くの学生が正しく書いていた。意味を聞くと、「過ぎる＋労働＋死」「労働＋火災の災」という理解ができていた。

3-2-1-3　春学期：教材について

配布資料が多いため、学期の初めには戸惑う者もいたが、手順に慣れるのは早かった。ワークシートはテスト後の提出を義務づけたが、毎回の復習テストが終わっても未提出で、まとめて出す者もいた。見出しがある記事は答え合わせに渡したが、全部の配布資料が多かったので、配布ではなく板書にした方がよかっただろう。

3-2-1-4　春学期：学習目標の達成

学習目標の達成について、内容理解力、語彙の点から報告し、最後に文章作成能力への反映について考察する。

内容理解力の確認は口頭の質疑応答を中心としたため、担当者の実感の域を出ず、客観的に測る指標としては不適切だったと言わざるを得ない。また、ワークシートと復習テストの設問も選択式であったため、学習目標の達成度を測るのには不十分な形式だった。シラバス作成時点に客観的、かつ具体的な評価指標を設定しておくべきだった。

質問への答え方を見ると、文章を構造からとらえて読んでいるのではなく、1 文ずつ読んで理解しようとしているようだった。このため省略や長い連体修飾節のある文章の理解度は低かった。10 回の記事を例に報告する。

記事名「ときめく片づけで『影響力のある 100 人』に」近藤麻里恵氏（30）

「ときめくものだけを手元に残す」という独特の整理・収納術を提案する片づけコンサルタントだ。国内で 154 万部売れた著書『人生がときめく片づけの魔法』（サンマーク出版）が米国でもヒットし 4 月、米タイム誌の「世界で最も影響力のある 100 人」に、日本から作家の村上春樹氏とともに選ばれた。　〔第 1 段落〕（2015 年 6 月 2 日　日本経済新聞・朝刊）

2 文目を読み、数名が「米国でヒットし（たから）…選ばれた」ではなく、「国内で 154 万部売れた（から）…選ばれた」と解釈した。更に、「作家の村上春樹氏とともに」なので、近藤麻里恵氏の職業は「片づけコンサルタント」ではなく作家であると考えて読み進め、その後の内容と齟齬が生じてしまった。

これは、語彙を中心とした授業の進め方に問題があったからだと考えられる。構造が単純な記事の段階では、語彙を頭に入れてから、一気に読むやり方も可能だった。しかし、それでは語彙を追って一文ずつ読むことはできても、文章全体の構造をとらえることができなかった。また、主語が省略されてしまうとそれ以上読み進められなくなったり、連体修飾部分が長いと多量の情報を処理できなくなったりしてしまった。文章を語彙の連結としてではなく、構造と意味のまとまりからとらえる指導が欠けていたためである。文全体の構造で大まかな内容を押さえ、次に修飾関係を見ていくなどの作業をしていれば違った結果が出ていたかもしれない。また、説明や確認の質問は文レベルで行うことが多かったため、部分的な理解は正しくできても文章全体の意図がつかめないこともあった。文章の全体像の把握のためには、接続詞の機能に注目させたりして、文段レベルに目を向けさせる必要があったと思われる。

次に、語彙については、重複語彙を中心に語彙定着の目標はある程度達成できた。単に頻出させるのではなく、関連を持たせて重複させると定着が良かった。定着度を測る指標の一つとした読み方の作業の時間は、11～14 回の流れの中で短縮が確認された。語彙に関連性がある記事が続くと、語彙力が高まり予備知識が増えるため、初見の単語を推測する力も向上するからだと考えられる。言い換えると語彙が予備知識になるのであろう。

3-2-2　2015 年秋学期

3-2-2-1　秋学期：授業の進め方

秋学期は授業の進行に伴い、学生の様子を見て変更した点が多かった。

その理由は以下の通りである。慶應大学日本語・日本文化教育センター　日本語研修課程では、秋学期に来日し、1 年間在学する学生が多く、秋学期に初級を終え、春学期に中級科目を履修する学生がほとんどである。このため、中級の新聞講読科目においても春学期の学生の方が相対的に日本語能力が高かった。しかし、秋学期「新聞講読 5」ではこのことを考慮せずに春学期と同様の授業の進め方をしたため、実質的な授業開始回である 3 回目と、それに続く 4 回目の授業で学生のレベルに合った授業が行えなかった。特に、春学期の問題点であった、語彙を追っていく読み方の欠点が露呈した。このやり方ではある程度の文法力の下支えがあれば、語彙が頭に入ったことにより、速読が可能となるが、秋学期の学習者は春学期より文法力が弱く、速読の準備ができていなかった。そこで、文法力と語彙力の不足に対応して、授業を再構成し、5 回目から下記の①～④のように授業の進め方を変更した。更に、11 回目からは⑤の変更を加えた。

①記事を前渡しし、予習をさせる：春学期に比べ、漢字理解力が低いので授業の中で説明するのでは時間が足りないため。予習ができるので、長い記事でも扱えるようになり、記事選択の幅は広がった。

②文字数の多い記事も扱い、複数回に分けて読む：書き言葉に慣れていない学生が多く、毎回異なる記事を読むことが負担であったため、2 週目の予習の負荷を下げることが目的であった。また、同一テーマを複数回で扱うことで、特定分野の語彙の定着を図った。

③ワークシートに記述式の問題を入れる：長い記事には事実関係だけでなく背景が書かれているものが多い。そのため、選択式ではなく、自分で文を書いて内容を確認することが必要だと考えたからである。学習者が書き入れる部分が多いため、結果的に添削時に思考の過程を読み取ることもでき、有効な情報となった。

④漢字の読み方を学生に板書させる：予習が前提なので、読み方を書く作業の時に早く正しく書ける学生が春学期より増えた。それらの学生に声を

かけて、1 人 5 単語、5 名ほどにホワイトボードに読み方を書かせた。外の学生はそれを見て訂正する。作業の個人差の調整と、学生に自分の作業時間・漢字力を相対的に把握させることにもなった。

⑤構造の理解を中心にする：11 回目から、記事の全文を板書することにした。記事の文字数は減らし、1 文ずつ文構造の面から説明をした。手順は中級の総合的な科目で行っているものと同様である。文レベルでの修飾関係、文段レベルでの因果関係の理解力を高めることを目的とした。因果関係、時間の前後関係などが理解できないのは、文構造が理解できていないからだと判断したためである。

変更後の進め方を 11 回目の記事を例に（1）～（3）で説明する。

授業例：「樹木　毎年 150 億本減　研究チーム保護訴え」

研究チームは、地上から約 1.3㍍の高さの位置で、直径 10㌢以上の太さがある植物を樹木と定義。〔第 2 段落〕 （2015 年 9 月 3 日　讀賣新聞・朝刊）

（1）基本的な構造のみを残した文を板書する。

「＿＿＿は、＿＿＿＿＿で、＿＿＿＿を＿＿＿と定義。」

学生に読ませ、教師が

「研究チームは＿＿＿＿＿で、＿＿＿＿植物を樹木と定義。」と下線を埋めていく。これが基本構造であることを確認する。次の学生にも同じ文を読ませ、修飾部分を書き加えていく。「直径 10㌢以上の太さがある植物を樹木と定義。」

この作業で複数の学生に読ませることになり、漢字の読み方の練習もできる。このように第一段階で押さえるべき情報と、第二段階で加わってくる情報入手の手順を視覚化した。また、全体構造から修飾関係へ視点を移していることを確認する。記事全文で同様の作業を行う。

（2）構造と修飾関係の説明の後、「太い→太さ」の関係を確認。「A を B と

定義する」を使った例文を提出する。

(3) 最後に、段落レベルでの内容確認の質問をする。

変更後の学生の様子についてまず①～④に関して報告する。秋学期の学生は予習状況に個人差があった。辞書を見ないでワークシートに読み方を書く作業の間、分からない読み方が多い学生を見ていると、予習をしていないようだった。予習をする学生は初回レベルチェックテストで点数が低くても、漢字の読み方を書くのが早く正確であり、復習テストも満点近くを取った。また、記事を読ませても読み方に困難が少なかった。予習をしない学生はワークシートに読み方が分からない漢字が多く、授業で記事を読ませても、読むべき箇所を間違えることがあった。予習の個人差は記事の前渡しの効果とも関わるため、軌道修正の必要があると判断した。後述の「3-3　改善案」で予習についての修正案を提示する。

次に、⑤の導入後の学生の変化について報告する。最も変わった点は」内容質問に対し、質問箇所を正しく見定め、必要な情報だけで答えるようになったことである。12 回の授業を例に報告する。

①大阪大学の関谷毅教授らは、額に貼り付けるシート型の脳波測定装置＝写真＝を開発した。②在宅で負担なく睡眠中の脳波を測定でき、生活習慣病との関連が深い睡眠障害の早期発見に役立つとみている。〔第 1 段落〕 ③睡眠障害は仕事のミスや交通事故につながるだけでなく、肥満や、糖尿病のリスクを高めることが知られている。〔第 4 段落〕 （2015 年 11 月 30 日　日本経済新聞・朝刊）

〔第 1 段落、2 文目〕

②「[大阪大学の関谷毅教授らは] 在宅で負担なく睡眠中の脳波を測定でき、生活習慣病との関連が深い睡眠障害の早期発見に役立つとみている。」

まず、省略部分を言わせ、次に連体修飾部分の関係を説明させたが、省略された主語を 1 文目から見つけ、次に「睡眠障害」と「生活習慣病」の関係も正しく理解できていた。

〔第 4 段落、1 文目〕

③睡眠障害［原因］は仕事のミスや交通事故につながる［結果(1)］だけでなく、肥満や、糖尿病のリスクを高める［結果(2)］ことが知られている。

「だけでなく」が［結果(1)］と［結果(2)］を結ぶことをつかみ、全体の原因・結果の関係に視点を広げることができていた。

最後に、記事の文字数について述べる。春学期には授業内でワークシートの答え合わせをしたが、秋学期には時間が足りなくなり、できなかった。そのため、学生が提出した後、添削する際に内容理解を測ることになったので、フィードバックが遅くなってしまった。時間不足の原因は、漢字の読み方と内容の説明に時間がかかったことだと考えられる。漢字の読み方に時間がかかったことについては、学生の予習不足と、記事が長すぎて漢字量が多かったことが指摘できる。構造の説明を導入してから内容理解力が向上し、時間が短縮したことから考えると、問題はやはり予習方法と記事の長さにあるのだろう。では、適切な記事の長さはと考えると、現時点では文字数が 1 回で 250 字前後と思われる。これより長いと語彙数が増え、説明時間も長くなるからである。この字数は 11 回「樹木　毎年 150 億本減　研究チーム　保護訴え」と 12 回「額に貼り脳波測定　シート型自宅での利用 OK ①」を扱った授業活動の結果に基づき算出したものである。

3-2-2-2　秋学期：記事の選択

春学期同様、記事の選択は①配置時期、②語彙の関連性の点から行った。

9 月には身近で関心がある分野の「マンガ」「海外」から始めて、漢字語彙に慣れることを狙ったが、初見の記事を読む準備が十分ではなく、未消

表 6　2015 年秋学期　使用教材

回数	授業内容	分野
①	個別学習指導期間	
②	初回レベルチェックテスト 「労働関連 3 法案⑦　有休義務化　ホントに休める？」 （2015 年 6 月 26 日　朝日新聞・朝刊）	政治
③	「マンガ海外発信へ合併」 （2015 年 9 月 2 日　読売新聞・朝刊）	経済
④	「TPP 大筋合意」 （2015 年 10 月 7 日　日本経済新聞・朝刊）	経済
⑤	特集①「女・男が生きる　長時間労働の呪縛」 （2015 年 10 月 12 日　讀賣新聞・朝刊）	社会
⑥	特集②「日本人って　働きすぎてるの？」 （2015 年 10 月 12 日　讀賣新聞・朝刊）	社会
⑦	特集③「育児と両立　妻に偏る負担」 （2015 年 10 月 12 日　讀賣新聞・朝刊）	社会
⑧	特集④「仕事人間世代『残業　成長のため』」 「定年の夫　忍び寄る孤立化」 （2015 年 10 月 12 日　讀賣新聞・朝刊）	社会
⑨	「迷える時代の羅針盤？『哲学』人気じわり」① （2015 年 4 月 3 日　讀賣新聞・朝刊）	社会
⑩	「迷える時代の羅針盤？『哲学』人気じわり」② （2015 年 4 月 3 日　讀賣新聞・朝刊）	社会
⑪	「樹木　毎年 150 億本減　研究チーム　保護訴え」 （2015 年 9 月 3 日　讀賣新聞・朝刊）	社会
⑫	「額に貼り脳波測定　シート型自宅での利用 OK」① （2015 年 11 月 30 日　日本経済新聞・朝刊）	科学
⑬	「額に貼り脳波測定　シート型自宅での利用 OK」② （2015 年 11 月 30 日　日本経済新聞・朝刊）	科学
⑭	「カフェイン中毒」 （2015 年 12 月 22 日　讀賣新聞・朝刊）	社会

化に終わった。固有名詞が複数入った長い連体修飾節については、修飾関係が把握できていなかった。また、想定したよりマンガに興味がある者が少なかった。「TPP」は経済関連語彙を増やすことが目的だったが、この交渉自体を知らない者が多く、想定との間にずれがあった。これらのずれは、具体的な内容の記事は関心がある者を限定してしまうことが原因ではないかと考えた。そこで、時事的な記事ではなく、時代の側面を切り取る内容で、語彙に汎用性がある記事に切り替えた。春学期と同様、同分野を連続して取り上げ、「働く」がテーマの特集記事を 5〜8 回で扱った。5 回に各記事の冒頭を読み、基本語彙を導入した。6 回は日本の長時間労働についての解説文。7 回は妻の意見。8 回は仕事人間の夫側の意見と夫の定年後の孤立化、というように視点を変えた記事を連続して扱った。「働く」の特集であるため「働」周辺の語彙が重複して使用され、既習漢字との組み合わせで「共働き・共に働く」などの語彙として登場した。また、「企業」（日本企業・中小企業）「育」（育児・子育て・育つ）も頻出したため定着が見られた。「育児中」は「…中」の使い方につなげることもできた。6 回は解説で、語彙は多いものの論理的な構成である。これに対し、7・8 回は男女それぞれの立場から書かれていて、視点が変わると語彙も変わるという難易度が高い内容だった。しかし、5 回以降、重複語彙が増えていたため、内容をよく整理して理解していた。

次の「哲学人気じわり」は、春学期と同じ記事を使用したが、半年前の内容でも違和感なく読めた。従って、「働く」の特集記事からは、語彙に汎用性のある記事であれば読む人が限定されないこと、また「哲学…」からは時事的でなくても問題がないことが示された。これらのことにより、学期前に複数の記事を選んで、関連性のある流れを準備しておくことも可能だということが分かった。

11〜13 回は構造の説明に適した、科学分野の記事を使用した。14 回の「カフェイン中毒死」は深夜勤務とカフェイン摂取の関係を扱った内容で、

働き方と科学分野の語彙がバランスよく扱われていた。

3-2-2-3　秋学期：教材について

学期当初は春学期と同様の教材を使用したが、授業の方法の変更（3-2-2-1 参照）に伴い、5 回目から教材も変更し、記事を前渡した。また、春学期の反省から「見出し」が書かれたままの記事の配布をやめた。

3-2-2-4　秋学期：学習目標の達成

学習目標の達成について、内容理解と語彙の点から報告し、最後に文章作成能力への反映について考察する。

内容理解は授業内の質疑応答とワークシートの記述から理解度を把握した。9 月から最も伸びた点は、質問の意図に合わせて解答するようになったことである。当初はどの部分を答えればいいか分からない、または不要な文まで言うなどが見られたが、口頭では 9 回ごろから「原因」「結果」「特徴」などを意識して答えるようになった。記述の方は、11 回以降、ワークシートに簡潔で十分な内容で記述するようになった。後者は授業の進め方を変更したのと同時期であるため、構造の説明との関連が考えられる。また、科学・医療分野の記事だったため、事実関係が簡潔だったことも指摘できるだろう。

語彙は予習を課していたため、ワークシートに読み方を書く速度は定着度の指標にはできなかった。復習テストにおいて数回、同じ漢字を出題し、定着度を見たことがあったが、予習をする進め方の場合、やはり漢字語彙だけを取り出して定着度を測ることは難しかった。新出語を説明する時に、同じ意味の既出単語があれば挙げさせ、語彙の定着を見ることもあったが、体系立てて行ったわけでない。シラバス作成時点で客観的、かつ具体的な評価指標を設定しておくべきだった。春学期の反省点が生かされていなかったと言える。

では、秋学期に語彙が全く定着していなかったかというと、特集記事を連続して扱った 5〜8 回において、内容理解を促していたのは語彙力で

あったことから、やはり語彙が積み重ねられていたと言えるだろう。

また、12 回目のワークシートで、記事に出てきた単語と同じ意味を持つ単語を書かせることで、語彙の広がりを確認する質問を出した。「会社：企業」「5 人に 1 人：2 割」「医療機関：病院」などはすべて以前に読んだ記事に出てきたものである。今後、このように同義語・反義語などを書かせて語彙の定着を確認する方法を採り入れることを検討したい。

最後に文章作成能力への反映について報告する。授業目標の一つとして、文章作成能力の向上があった。しかし、実際には文章作成も視野に入れて授業を行うことはできなかった。ただ、語彙力と内容理解力に関連性がみられたように、文章作成力とも結びつきがあると考えられる。「新聞講読 5」においては、語彙定着・内容理解力の向上がどのように文章作成力に反映されたかを検証することはできなかったが、別の総合科目も履修している学生が、記事にあった語彙を作文に使うケースがあったので、技能間の連携をとる上で参考にしたい。

3-3　改善案

学生の様子に合わせて授業の進め方に修正を加える必要はあったが、春・秋学期の授業の基本的な型は有効であると思われる。そこで、不足していた点を修正し、授業の進め方（修正版）を作成した。

①予習：必須の漢字語彙と難解な単語のみ予習させる。それらをリストにして渡すが、記事は渡さない。初見で記事を読む緊張感を大切にするためである。

②初見で、「見出し」を隠した記事を読む：文字数が 200～250 字程度を 1 回で読む。適当な文字数の記事がない場合、担当者が編集する。記事は半年以内程度を範囲とする。

③ワークシートの漢字の範囲：記事の内容理解に必須の語彙のみとする。また、以前のワークシートに載せたものであっても、その記事にあれば定

着のために書かせる。春学期を例とすると、以前に出てきた「労働」「勤務」が、「長時間労働」「深夜勤務」といった単語として登場した場合、その回のワークシートに載せる。

④記事の配置の順番など：（1）数字が中心の記事（2）科学分野など、事実関係が中心の記事（3）社会・文化的背景も入る記事の順番で扱う。また、同一分野を 3〜4 回連続して扱い、特定分野に頻出する語彙を増やす。このことにより語彙の重複が速読に生かされることを実感させる。適当な記事を 4 回集めるのが難しい場合、春学期に「トヨタ　終日在宅 OK」（日本経済新聞）で行ったように、異なる新聞社の記事を扱うのであれば採り入れやすいだろう。

⑤文の構造を板書して説明する：（1）大意（2）修飾関係の 2 段階で理解させる。その際、読み方の確認のため、複数の学生に読ませる。

⑥語彙定着のための設問：12 回目のワークシートで、記事に出てきた単語と同じ意味を持つ単語を書かせることで、語彙の広がりを確認する質問をした。「会社：企業」「5 人に 1 人：2 割」「医療機関：病院」などはすべて以前に読んだ記事に出てきたものである。このように同義語・反義語などを書かせて語彙の定着を確認する方法を採り入れる。口頭で行うのではなく、記述させることにより、学生も意識づけられ、担当者も評価指標にすることができる。これは授業回数を重ねて、ある程度語彙の蓄積ができてから導入した方が効果的だろう。

⑦内容理解の確認のための設問：客観的な評価をするため、口頭で答えさせた後で、ワークシートでも同じ質問をする。また、見出しを選ぶ設問で、大意のまとめ方を知る。学期後半では自分で見出しを作り、まとめる練習をする。理解度を測るために内容のまとめを文章で書かせたいところだが、時間的制約と文章表現力の面から困難なので、それに代えて見出し作業を入れる。

⑧復習テスト：ワークシートに記述を採り入れる一方で、復習テストは

10 分程度に収めるため、内容質問は選択式のままとする。漢字は読み替えを増やす。また、語彙定着を測るために、重複して登場したものも積極的に入れる。読み替えの例：秋学期・11 回に「地球上・地面・地上」を出題。重複登場の例：12 回に「測定・計測」を出したが、「測」は 11 回に「観測」で既出。

春学期と秋学期とでは学生のレベルが違うので、学生の様子を見て調整し、運用する。学生の様子の把握には初回レベルチェックテストが有効である。

4. 今後の研究課題

4-1 語彙の選定など

中級の書き言葉に必要な語彙の範囲をどこまでとするか、2 学期の結果も踏まえて検討したい。また、接辞は語彙の拡大と関連性があると思われるので、語彙選定、提出方法の面からも接辞の扱いについて考察したい。

4-2 関連技能との連携

定着した語彙や内容理解力が別の技能でどのように生かされるか、具体的には文章作成能力との関連を考察したい。そのことにより、新聞講読科目の授業にも効果的なフィードバックができると思われる。

4-3 上級文法の扱い

文脈上外せない上級文法（「ざるを得ない」など）の扱いについても検討したい。

5. おわりに—感想として

2 学期を通じて、中級の読解においては構造理解が欠かせないと感じた。

大意の把握にも、やはりまず文章の構造を理解し、それに基づいて因果関係などを正しくとらえることが必要だと気付かされた。

また、学習者の理解度を測る指標を設定することの大切さを痛感した。今後はシラバスの段階で客観的で具体的な確認方法を設定し、それに基づいて学習者へのフィードバックを行ったり、授業方法に修正を加えたりするつもりである。

最後に、漢字の扱いについて述べる。新聞記事を読む上で漢字語彙を増やすことは避けては通れない道だが、負担を感じる学習者もいる。しかし、新聞で扱われる漢字は数が決まっていることに加えて、同時期の紙面で扱われる記事は対象が重複するため、語彙も螺旋を描くように重複して登場する。経済や科学のように分野を絞れば、更に使用語彙は限定されることになる。2 学期の授業で、漢字は個々の意味を把握することで、組み合わされた語彙への理解度が上がり、語彙数が増えることを実感した。今後はこの点を学習者に認識させることができるような授業運営を心掛けたい。

謝　　辞

授業の運営につきましては日本語・日本文化教育センターの村田年先生の助言を参考にしました。

使用教科書

「中級日本語」（東京外国語大学　留学生日本語教育センター　編著）1994 年 4 月 20 日　初版第 7 刷　発行

「中級日本語　語彙・文型例文集」（東京外国語大学　留学生日本語教育センター　編著）2002 年 12 月 13 日　初版第 6 刷　発行